印度學佛教學研究第五十四巻第一号　平成十七年十二月

普寂の華厳理解

西村　玲

一、はじめに

普寂（宝永四・一七〇七～天明一・一七八一）は、日本近世を代表する学僧の一人である。伊勢桑名の浄土真宗、源流寺の長男として生まれたが、真宗教義に反発し、二十八歳で生家を出た。その後、浄土律僧として諸国を歴遊し、五十七歳の時に、江戸目黒の長泉律院に住職として招かれた。江戸では、浄土宗総本山である芝の増上寺で、華厳学をはじめとする講義を行い、その講草の多くが増上寺学侶の浄財により開版されている。『華厳経探玄記』を講義している中に病を得て、天明元年の十月十四日、念仏を唱えつつ亡くなった。

普寂は釈尊当時を理想とし、小乗戒を遵守する律僧として生涯を過ごした。[1] 四分律を実行し、念仏三昧と坐禅を行っている。富永仲基と同時代人であり、当時の排仏論であった大乗非仏説にも応えた。[2] 自伝によれば、普寂は若年時に大乗仏説への疑問を抱き、坐禅と念仏三昧の修行によって、それを解決している。[3]

普寂の思想は、各宗派の立場からは異端として位置づけられており、華厳学においても同様である。湯次了榮は、大正四年（一九一五）に『華厳大系』を著し、普寂の華厳理解は実践家の立場からなされていること、その根本は如来蔵心の重視にあることを明らかにした。湯次は、普寂が律僧として実践行を重視するあまりに、華厳の観行を無用のものにしたと、華厳学の立場から批判している。[4]

では、普寂自身にとって、華厳はどういう意味を持っていたのか。若年時に華厳を自らの教学として選択した普寂は、亡くなる直前まで華厳を講義し続けた。小乗戒を実践し、釈尊正法への復帰を唱えた普寂が、なぜ華厳教学を必要としたのだろうか。さらに、華厳を旨とした普寂が、どのように大乗非仏説に応え得たのか。

近世僧侶が、いかに華厳思想を自らの実践行の支えとし、それによって時代的思潮であった大乗非仏説にどう応えたか。

普寂の華厳理解を通して、近世仏教思想の生きた内実を考察する。

二、竪歴五教

普寂が執筆を始めたのは、江戸に来た五十七歳以後からであり、最初に、華厳関連の著作にとりかかっている。まず普寂の修行論を見ておこう。執筆年代は不明であるが、仮名書『諸宗要義略弁』の華厳宗の箇所には、次のようにある。

然バ本格ナレバ、マヅ人空ヲ証シ、次ニ法空ヲ悟リテノチ、如来蔵教ニイルベキナリ。……閻浮提ハ、五濁増時ナルユヘニ、本格ナレバ人空カライルベキ也。ソレユヘ仏在世正法五百歳ニイタルマデハ、四阿含ノ教、四諦無我ノ理ノミ、ヲシエ玉ヘルトミエタリ。

（『諸宗要義略弁』日仏全三、四七三上）

この世の衆生は重い煩悩を背負っているから、本格的な修行はまず小乗教の人空を悟り、次に法空を悟って、如来蔵教に入るべきである。だから釈尊は小乗教を説いたのである、という。凡夫は小乗教を実践して、後に大乗に入っていくべきであるというのは、生涯一貫した普寂の主張であった。

それでは、小乗教から始まる修行の全体像は、どのように考えられるのか。普寂は、「譬えば一顆の明珠を三重に封裹するには、先ず絹帛を以て裹み、次に木匣を以て収め、後に鉄函を以てこれを納む」[5]として、珠を三重に封印することにたとえて、修行を如来蔵心の封印を開いていく過程と捉える。三重の封印は、それぞれ何によって解かれるのか。

三蔵教はこれ我執・煩悩障を対治して、分段三界の妄縛を離れしむる教なり。猶お鉄函を開くが如し。二空唯識法門は、乃ち二執二障麁分を対治するの教にして、猶お木匣を開くがごときなり。如来蔵縁起の教法は、乃ち二執二障細分を浄治するの秘密蔵にして、猶お絹帛を開くがごときなり。

（『顕揚正法復古集』日仏全三、四五四下）

最初の鉄箱を開くことが小乗教であり、木箱の開封が法空教、絹布を解くことが如来蔵教にあたる。これらの封印を解くことによって、清浄な魂である如来蔵心が徐々に顕れていくというのであるが、これら魂の封印を解いていく教えの順番が、華厳の五教判である。

秘蔵は乃ち如来蔵心なり。……初め人空智明を開きて煩悩を破し……これを小乗と名く。法空智明は二障の麁分を照破して菩薩三賢道を成就せしむ、これを始教と名く。二空智満つれば……如来蔵心出現す、これを十地と名く。然るに初地より七地に至るまで……この分齋に於いて終教を建立す。第七地の無相行の究竟にまさに八地に入らんとするに煩悩心行永く現前せざる位に大白法界に入る。……この分齋に由て頓教を建立す。これを過ぎて已後、心性円現し仏境界に入りて……この分齋に拠て円教を建立す。

（『華厳五教章衍秘鈔』大正蔵七三、六六〇中）

小乗教による人空から、大乗始教へと進んで、如来蔵心が

出現した時に、終教に入る。第七地の最後に頓教を経て、第八地以後は仏の境界である円教に入る。普寂にとっては、華厳の五教判は修行の道程を表すものであり、五教は下から上へと一段一段登っていくべき階段である。

教法の権実、これ無くんばあるべからず。……横に五教の学人有ること無きに非ずと雖も、竪に五教を歴て以て五濁を治し、実相法界に進入する者、これ迦文一化の顕了門なり。

（『華厳五教章衍秘鈔』大正蔵七三、六四四中）

さまざまな教えの価値付けは、絶対に必要である。五教を下から上へと経て行き、法界に進入して行く者が、釈迦仏一代の明らかな教えに沿っている、という。[6] 普寂にとって、華厳の五教判は、いわば神的故郷に帰り着く魂の上昇と救済の過程であって、生を超えて歩むべき修行の道程を示すものであった。さらに、五教の最下層にある小乗教を、はるかな旅の最初の一歩として保証するのが、彼の同教理解である。

三、同教甘露

普寂は、最終的な目標にあたる仏の境界は、普賢菩薩のみに許されるものである、とした。

所謂る別教門[7]とは、その理広大高妙にして無上無過と雖も、正に被る所は唯だこれ普賢大機のみにして、一切衆生の機を入れず。但だ有縁の機のみ、見聞の益を得るのみ。

（『華厳玄玄海篙測』日仏全一三、五二八下）

それ以外のすべての衆生は最高の教えに入れず、有縁の者だけが、その教えを見て聞くことができる、とする。普寂が考える仏の真の境界は、ほとんどすべての者にとって入れないものであり、仏は凡夫からは遙かに遠い。その姿勢は、凡夫の分際を次のように定義することにも、よく現れていよう。

娑婆世界、具縛の凡夫、これ見聞位の分齋なれば、十身の説法を信得するのみ。安ぞ十身盧舎那を見ることを得んや。

（『華厳五教章衍秘鈔』大正蔵七三、六三二上）

この世の凡夫は、教えを見て聞く分際に止まるから、仏の説法をただ信じることしかできないとされる。仏を見ることさえもできない者には、小乗教しか実行できない。

閻浮提五濁増時の凡夫、根鈍にして障重なれば、先ず人空智を以て我倒を対治するに非ざれば、則ち妄陰を転捨し、性徳を転得する由無きなり。……所以に我が仏世尊、四真諦・無我人法を以て、理教と為し、戒・定・慧を制定し、以て学処と為す。これ閻浮一化の正軌と為す。

（『顕揚正法復古集』日仏全三、四四九上―下）

この末世で重い煩悩を背負って生きる凡夫は、まず人空智によって我執を除かなければ、悟る方法はない。だから我が釈尊は、人空などを学ぶべき教えとし、戒・定・慧を実際に守るべき定めとした。これが、この世での釈尊一代の正しい

軌則である、という。

しかし、その小乗教こそ、はるかな華厳法界に到達するための最初の一歩であり、普寂はその点で、小乗教を華厳同教一乗とする。

且つ一切小乗・三乗等、即ち華厳同教にして、これ乃ち凡夫・二乗と及び七地已前の菩薩をして、漸次に成熟し華厳法界に趣入せしむるの妙法甘露なり。……この故に同教一乗に義有て教無し。何を以ての故に。小・始・終・頓の外に、別の同教一乗の教無きが故に。

（『華厳五教章衍秘鈔』大正蔵七三、六二六下）

小乗教をはじめとするそれぞれの教えは、凡夫らをだんだんに華厳法界に導き入れる方途であり、華厳同教である。「同教一乗」には、各人を華厳法界に誘導するという意義のみがあるのであって、小乗教などのそれぞれの教え以外に、同教一乗という独立した教えはないとする。さらに小乗教にとどまらず、世俗倫理である人天乗も、華厳同教とされる。

実は乃ち三乗・小乗・人天乗は、華厳の腹心なり、手足なり、爪髪なり。……まさに未だ普教の機堪能ならざるに於いて、巧みに群機を誘て華厳法界に入らしむべし。然れば則ち三乗・小乗・人天乗の当体は即ち華厳同教一乗なり。

（『華厳五教章衍秘鈔』大正蔵七三、六八六下）

人天乗などは華厳の一部であり、すべての教えは華厳法界へとつながる道として、その本質は華厳同教であるとする。

普寂のいう同教一乗とは、仏を見ることも不可能なこの世の凡夫に、華厳法界への確かな道を開く理論である。これによって華厳の実践は、分に応じて万人に可能となり、現実にはまず小乗教の実践が求められることになった。

四、おわりに

普寂の華厳理解は、華厳の五教判を、現在から遙かな未来に成仏するまで、自らが生きて実行するべき道程として捉えるものである。その過程であるすべての教えは、華厳法界へつながる道として、華厳同教とされる。さらに釈尊は、凡夫が実行しうる小乗教を最初の一歩として、その正当性を保証する。普寂にとって華厳思想は、現在から成仏までの実践行を支える理論を与えるものといえよう。

普寂においては、釈尊正法の小乗教と、釈尊以後に発展した大乗教は、華厳五教判を媒介として、自らが実行すべき修行の道程となった。小乗教から大乗教への移行は、何生もかけて魂が歩むべき道程であり、これらはもはや矛盾するものではない。歴史的に見れば、これが普寂の示した、近世仏教からの大乗非仏説への答えであると考えられる。

1　石田瑞麿によって、普寂は近世浄土律の中核の一人であることが指摘される（『日本仏教史』岩波書店、一九八四年、二八

八頁）。律僧としての普寂については、拙稿「不退の浄土」（『東アジア仏教研究』三、二〇〇五年）、八二頁。

2　村上専精「普寂律師の大乗仏説論」『大乗仏説論批判』（光融館、一九〇三年、八四―一〇五頁、村上が普寂に共感していたことは二四六―二五一頁）。

3　自伝『摘空華』浄土宗全書一八、二八五頁上―二八六頁下。

4　湯次了榮『華厳大系』（初版一九一五年、復刻一九七五年、国書刊行会）、三八五―三八七、五三三―五三七、一三三頁等。

5　『顕揚正法復古集』日仏全三、四五四頁下。

6　「竪則（大正蔵七三、六四六中、則↓横）菩薩地前・地上。次第進趣、従三入亦一亦三、従亦三亦一入真一乗」とされ、竪は順番に教を登っていくことである。「横則一時有衆機。受始教者、是学大乗之人」云々とされ、横は各教を学ぶ者が同時に存在することである（『華厳五教章衍秘鈔』巻二、二三右。明和七年序、財団法人東方研究会所蔵版本）。

7　普寂は、華厳円教は別教一乗のみとして、同教を入れない。「教即五教也。……如其円教、至相・賢首併以円通自在主判無尽等、判釈之唯別教一乗称為円教。」（『華厳五教章衍秘鈔』巻一、大正蔵七三、六二四下）。

補注、原漢文史料は私に訓読した。

本稿は、平成十七年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の成果の一部である。

〈キーワード〉　近世、普寂、『華厳五教章衍秘鈔』、『顕揚正法復古集』、釈尊正法、華厳五教判

（日本学術振興会特別研究員、博士（文学））

会費に関する内規

(1)　会費は、年額次の通りとする。

①普通会員　六、五〇〇円

②名誉会員　免除

③維持会員　従来の負担金額

④特別維持会員　五〇、〇〇〇円以上

⑤準会員　六、五〇〇円

(2)　本内規の変更は理事会の議決による。

(3)　本内規は平成五年五月二十二日より施行する。

48. The Hell Picture of Nozoki Karakuri

Kiyoshi NEI

Nozoki Karakuri is a street performance. It took place in the 17th century. Spectators watch moving dolls and pictures, and so on, through a glass window in a box. Among the painted pictures, many were drawn from the idea of Buddhist Hell and Paradise. Nozoki Karakuri has been preserved in Fukae town, Nagasaki prefecture. It is one of the cultural treasures of Japanese Buddhism.

49. Religion of Minobusan and religion area in modern period

Shinchō MOCHIZUKI

Minobusan Kuonji-temple is Nichiren's hallowed ground. Nichiren lived in Minobusan in over nine years. Minobusan's hallowed ground was formed in medieval time.

This paper inquires into the time and places of worship in Minobusan region on the basis of their relevant materials.

50. Fujaku's View of the Huayan Thought

Ryō NISHIMURA

Fujaku (1707–1781) was a scholar-monk representative of the early modern period in Japan. He idealized the times of the historical Buddha and as a Vinaya monk practiced the Four-Part Vinaya. Scholarship to date has defined Fujaku as a heretic from the traditional doctrines. Huayan scholars have also criticized Fujaku's Huayan thinking, claiming that he is biased toward practice.

Fujaku considered the five kinds of teaching classified by the Huayan as something practiced by himself over a distance of many lives. The Huayan philosophy has supported his practice from the present time to the time of his becoming a Buddha in the distant future. Fujaku's approach integrates

"the lesser vehicle" which the historical Śākyamuni preached in his time with "the great vehicle" which arose after the death of Śākyamuni by using the Huayan school's hermeneutical scheme of the five kinds of teaching. In his view, both kinds of vehicles become the one practical path to becoming Buddha. From a historical point of view, Fujaku's theory is the early modern Buddhist's answer to the problem that the historical Buddha could not have preached the Mahāyāna sūtras.

51. A Study on Japanese Buddhism from the Radius of Buddhist Civilization

Shunji HOSAKA

52. Bibliographical Study of *Yuzu Enmonsho*

Takashige TODA

The general headquarters of the Yuzu Nembutsu sect is located in the Dainembutsu-ji temple, in Hirano ward, Osaka.

The Holy Saint Daitsu (1649–1716) got official approval to re-establish this sect in 1688, the first year of the Genroku era, in the Edo period.

He achieved several things during his lifetime. For example, he published the *Yuzu Enmonsho* in 1703, the 16th year of the Genroku era, and the *Yuzu Nembutsu Shingesho* in 1705, the 2nd year of the Hoei era. The first one exists neither as an original book nor in woodblock form. The other exists only as woodblocks. However I have found the book name *Yuzu Enmonsho* in the *Danrin Shingi narabi ni Jo* of 1696, the 9th year of the Genroku era.

Bibliography has proved that the oldest written source is the printed book of the *Yuzu Enmonsho* from 1834, the 5th year of the Tempo era. It had a role regarding permission to enter the sect, as any person who wanted to enter the sect had to memorize the *Yuzu Enmonsho*.

53. Priest Jōkei and his Faith in Prince Shōtoku in Light of the Materials in